

IR Office Newsletter

東洋大学IR室ニュースレター

Newsletter office

IR

CONTENTS

平成28年度新入生アンケート結果報告	
—志望順位からみた新入生の特徴—	02
平成27年度卒業時アンケート調査結果	
—入学時志望順位に着目して—	04
活動報告 高等教育研究部会の活動	06
開催報告 IR講習交流会	07
活動報告 山形大学IRシンポジウム報告	07
IR室シンポジウム開催報告	08
IR室活動報告	08

2017.3
第4号

副学長
メッセージ

「大学教育・研究の質的向上とIR」 副学長 北脇 秀敏

グローバル化の進展、知識基盤社会への転換、高等教育の量的な拡大、若者の価値観の変化など、大学を取り巻く背景が大きく変わってきている中、先進諸国をはじめ多数の国で、高等教育は量的な拡大から質的保証へと大きな転換期を迎えています。

東洋大学では、平成25年度に各学部・研究科において中期目標・中期計画を策定しました。今年度が最終年度にあたり、最終評価を行うとともに、新たに平成29年度から平成35年度までの中長期計画を策定、学長

フォーラムにおいて発表を行いました。各学部・研究科においては、これらの計画を着実に進め、教育研究の一層の充実に努めています。

高等教育の激しい国内外の競争の中、勝ち抜くためには教育・研究の一層の質的な向上を図ることが必要であります。これを実現するために、前述した中長期計画は、大学の教育研究の核となる学部・研究科の積極的な取組、教職員が一体となった努力が不可欠であります。

IR室においては、組織体制の充実

に伴い、高等教育研究に基づいた学内外の諸データ、各種学生アンケートの分析および中長期計画や教学全体の幅広い分析を行い、教育・研究の質的向上に向けたPDCAサイクルの一端を担う様々な活動を期待しています。



本学では、大学全体及び各学部、学科のさらなる教育改善を図るため、新入生アンケート・在校生アンケート・卒業時アンケートを実施しています。IR室は、学部別・学科別の集計・分析、留学経験の意義、学習経験と就職の満足度、GPAと大学・所属学部・学科への満足度、学習時間と授業経験などの相関関係や規定要因について様々な分析を行い、IR室運営委

員会、学部長会議、理事会等で報告し、学生の学習実態や教育改善のための情報を提供しています。今回は、「平成28年度新入生アンケート」及び「平成27年度卒業時アンケート」結果を踏まえ、志望順位に着目して、分析結果の抜粋をご報告します。

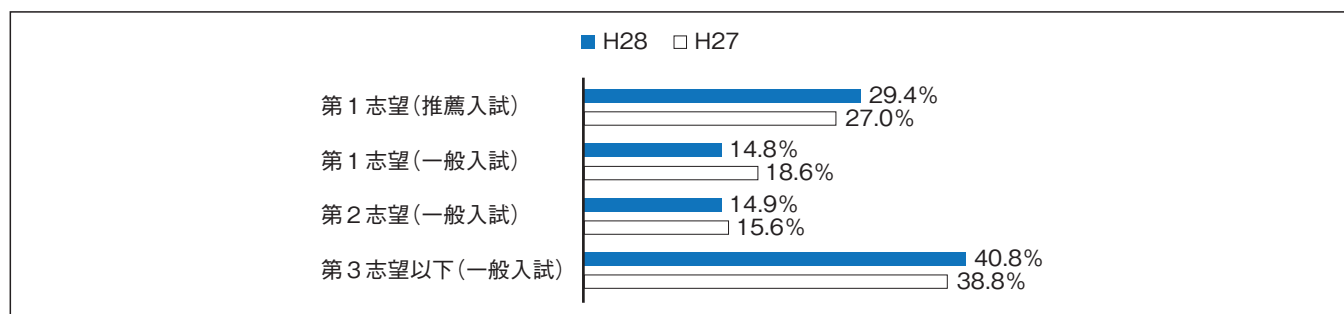
「平成28年度新入生アンケート結果報告—志望順位からみた新入生の特徴」

1. 調査概要

- 1) 実施時期：平成28年5月6日～28日
- 2) 調査対象：平成28年度新入生 回答者数4,797名 回答率63.3%
- 3) 調査方法：Webアンケート (ToyoNet-ACE)
- 4) 調査目的：入学後約1ヵ月がたち、オリエンテーションや大学の授業を経た新入生を対象として、入学の契機や理由等の他、今新入生が、どのような学生生活を送り、何を大学生活の目的に定め、大学についてどのように感じているかを中心に調査

2. 主な結果

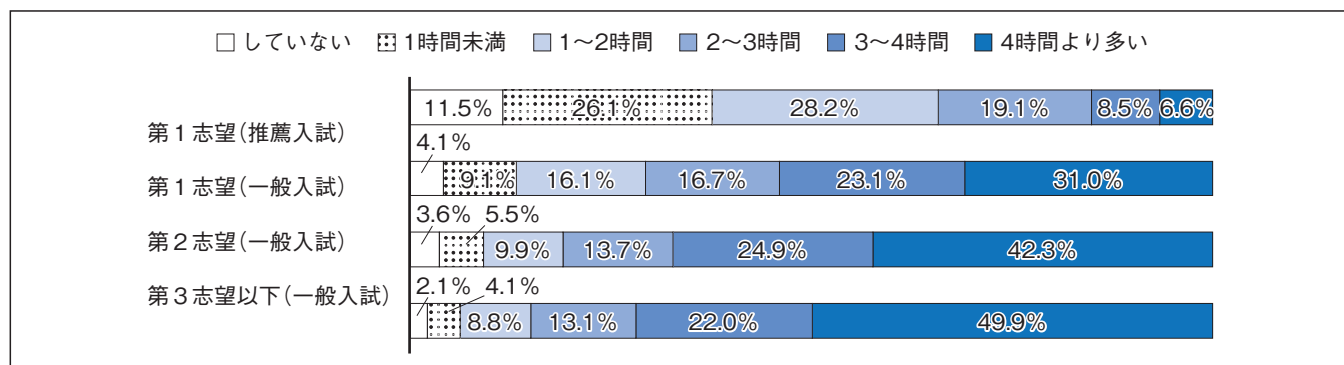
① 本学の志望順位は何位でしたか（1つ選択）



図に示す平成27年度から平成28年度アンケート調査回答者の志望順位の構成変化を見ると、第1志望（推薦入試）の割合は27.0%から29.4%と増えましたが、第1志望（一般入試）

の割合は18.6%から14.8%へ減少しました。これに対して、第2志望（一般入試）の割合は15.6%から14.9%、第3志望以下（一般入試）の割合は38.8%から40.8%となりました。

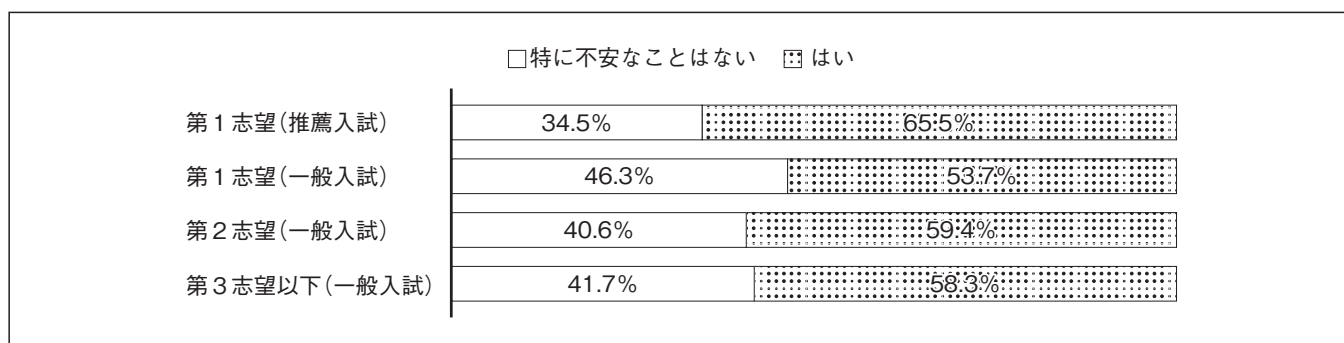
② 高校3年次、授業以外の、1日あたりの学習時間



まず、表に示す志望順位別「高校3年次、授業以外の、1日あたりの学習時間」を見てみると、学習を「していない」と「1時間未満」の割合は、第1志望（推薦入試）は最も高く、それぞれ11.5%、26.1%で、続いて、第1志望（一般入試）（4.1%、9.1%）、第2志望（一般入試）（3.6%、5.5%）、第3志望

以下（一般入試）（2.1%、8.8%）であります。これに対して、「4時間より多い」の割合が、第1志望（推薦入試）は最も少なく6.6%で、第1志望（一般入試）31.0%、第2志望（一般入試）42.3%、第3志望以下（一般入試）49.9%という結果でした。

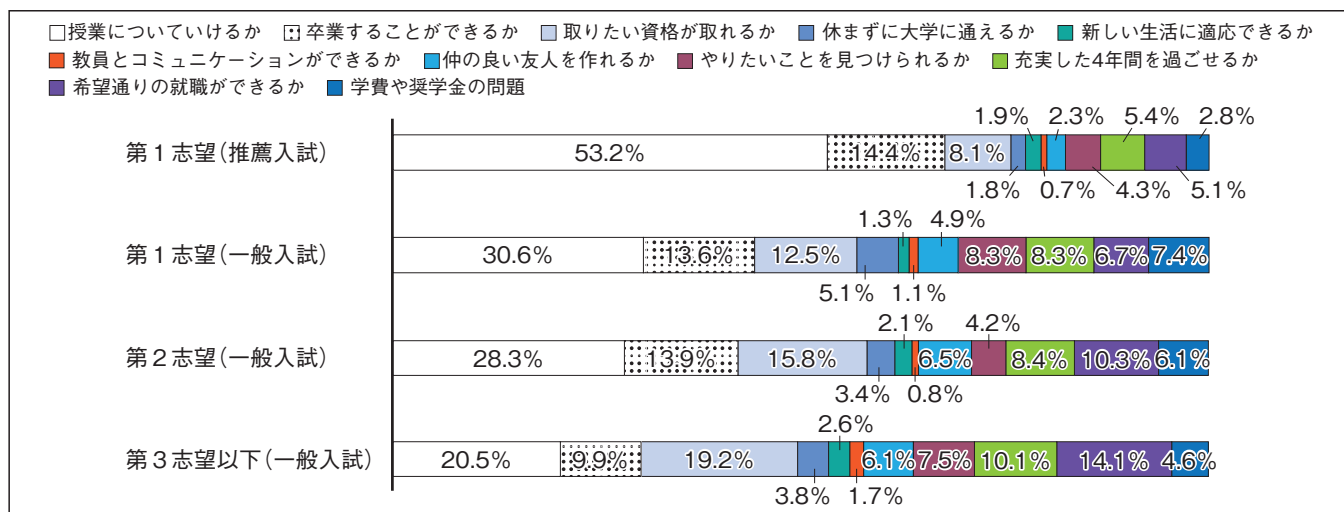
③-1 今後、不安なことはありますか



図③-1に示すように「今後、不安なことはありますか」という問いに、「はい」と回答する割合が第1志望(推薦入試)が最も多く、65.5%で、第1志望(一般入試)(53.7%)、第2

志望(一般入試)(59.4%)、第3志望(一般入試)(58.3%)といずれも50%を超えています。

③-2 「はい」と回答した場合の不安なこと



図③-2を見ると、「授業についていけるか」と回答する割合が、第1志望(推薦入試)は最も多く53.2%で、続いて、第1志望(一般入試)(30.6%)、第2志望(一般入試)(28.3%)、第3志望以下(一般入試)(20.5%)の順であります。また、志望別で10%を超える項目に関しては、第1志望(推薦入試)では、「卒業することができるか」、第1志望(一般入試)では、「卒業することができるか」(13.6%)・「取りたい資格が取れるか」(12.5%)、第2志望(一般入試)では、「卒業することができるか」(13.9%)・「取りたい資格が取れるか」(15.8%)、第3志望以下(一般入試)では、「取りたい資格が取れるか」(19.2%)・「希望通りの就職ができるか」(14.1%)・「充実した4年間を過ごせるか」(10.1%)であります。

るか」(12.5%)、第2志望(一般入試)では、「卒業することができるか」(13.9%)・「取りたい資格が取れるか」(15.8%)、「希望通りの就職ができるか」(10.3%)、第3志望以下(一般入試)では、「取りたい資格が取れるか」(19.2%)・「希望通りの就職ができるか」(14.1%)・「充実した4年間を過ごせるか」(10.1%)であります。

3. まとめ

高等教育の量的な拡大、若者の価値観の多様化の中、本学は他大学と同様に、第1志望以外の第2志望や第3志望以下の学生の割合が増える傾向が見られます。上述の分析から志望順位別で高校3年次、授業以外の、1日あたりの学習時間、また大学生活について不安と思う程度あるいは不安と思うことについては差異が見られました。

今後、「高校3年次、授業以外の、1日あたりの学習時間」が少なく、「授業についていけるか」などに「不安」と思う学生に対して入学前e-learningの実施、各キャンパスの学習

支援スペースの利用を通じ、学習習慣を身につけ、補習教育を行う等の「初年次教育」の強化、また「取りたい資格が取れるか」・「希望通りの就職ができるか」・「充実した4年間を過ごせるか」等の「不安」を感じる学生に対して「1・2年生向けキャリア形成支援」などの取り組みをさらに充実していくべきでしょう。志望順位別学生の特徴に応じた入学後のフォローなどにより、学生の大学生活への不適應を防ぐ手立てになると考えられます。

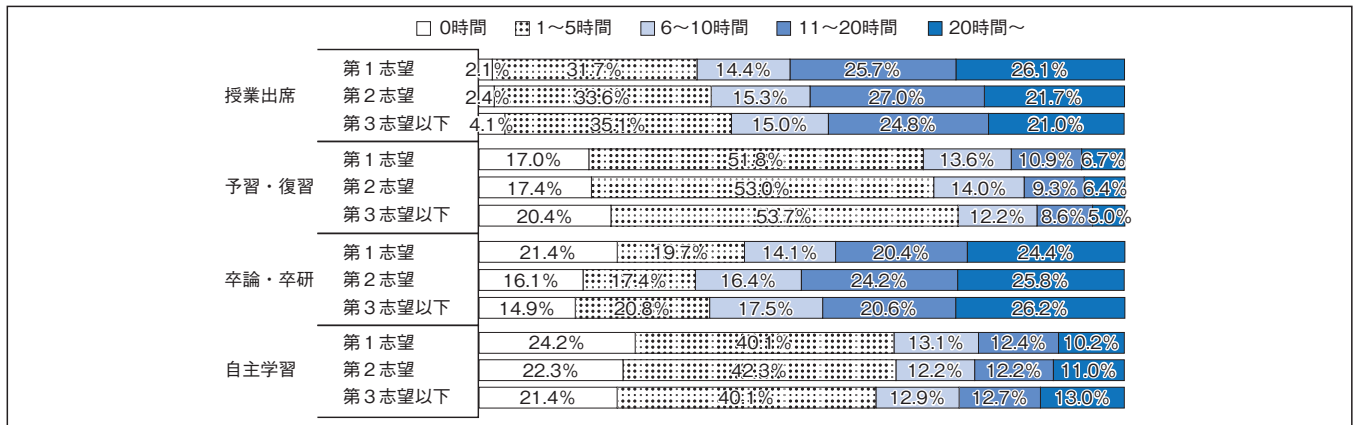
結果報告 「平成27年度卒業時アンケート結果報告—入学時志望順位に着目して」

1. 調査概要

- 1) 実施時期：平成28年3月23日 卒業証書・学位記授与式の時間内にて実施
- 2) 調査対象：全学部・全学科の卒業生、回答者数5,501名、回答率91.2%
- 3) 調査方法：マークシート用紙によるマーク及び記述方式
- 4) 調査目的：当該年度に卒業する全学生を対象に、授業・学習全般や大学生活全般、4年間の成果、大学への満足度などについて把握し、さらなる改革・改善を図っていくことを目的としている。

2. 主な結果

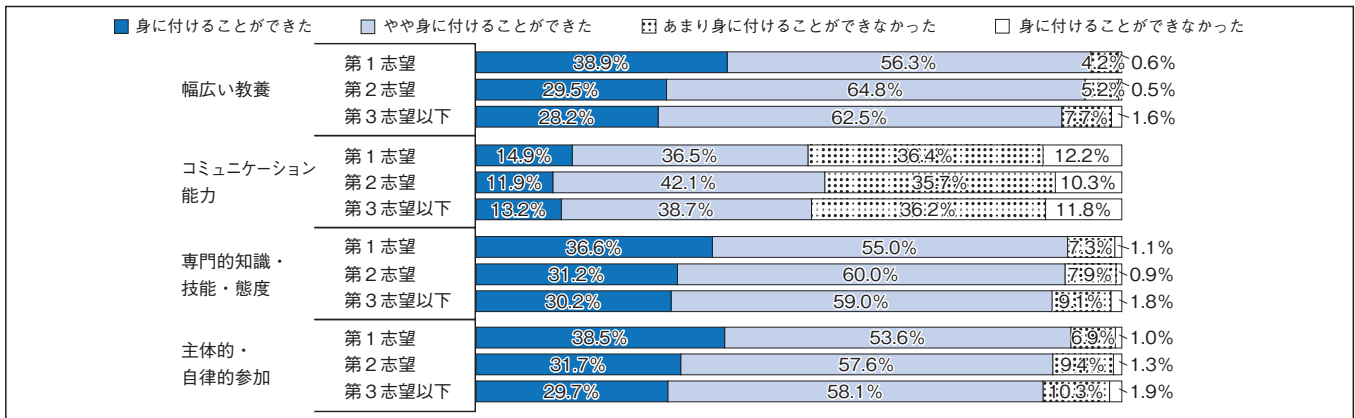
① 1週間の生活時間



図に示すように、1週間の生活時間について、第1志望の「授業などへの出席」（「20時間～」、「11～20時間」）での割合はそれぞれ26.1%、25.7%、「予習・復習」の時間が（「20時間～」、「11～20時間」）の割合はそれぞれ10.9%、6.7%、第2志望・第3志望以下より比較的長いに対して、第2志望・

第3志望以下の場合は「卒論・卒研」、「就職活動」、第3志望以下の「自主学习」の時間がより長い傾向が見られます。しかし、「自主学习」について、第1志望（24.2%）、第2志望（22.3%）、第3志望以下（21.4%）はいずれも「0時間」の割合は20%を超えています。

② 知識・能力を身に付けたか

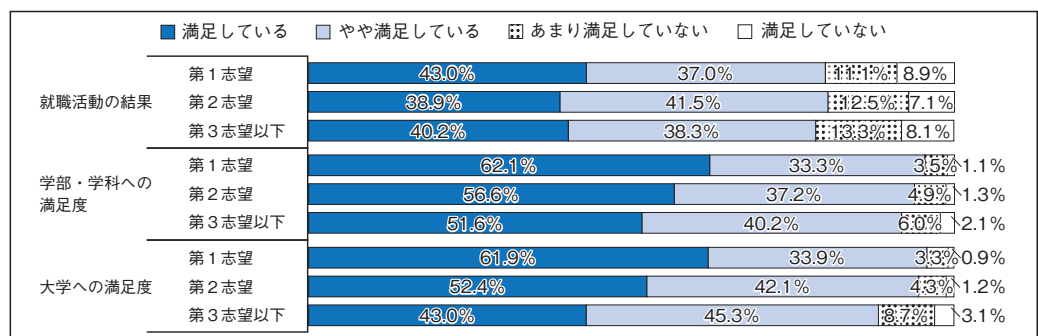


「知識・能力を身に付けたか」という問いに対して、「幅広い教養」・「外国語によるコミュニケーション能力」・「専門的知識・技能・態度」・「主体的・自律的な授業参加」のすべて

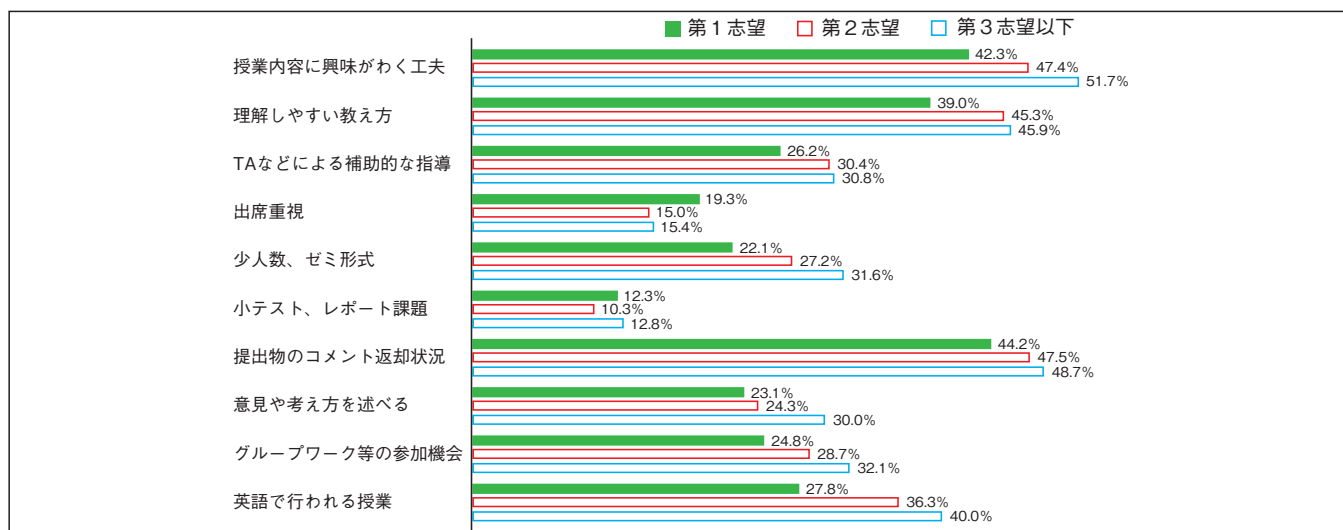
の選択項目では、「身に付けた」との回答の割合が、第1志望は第2志望、第3志望以下より高い傾向が見られます。

③ 大学、学部・学科、就職活動の結果への満足度

また、「大学、学部・学科、就職活動の結果への満足度」についても第1志望は第2志望、第3志望以下より高い傾向が見られます。

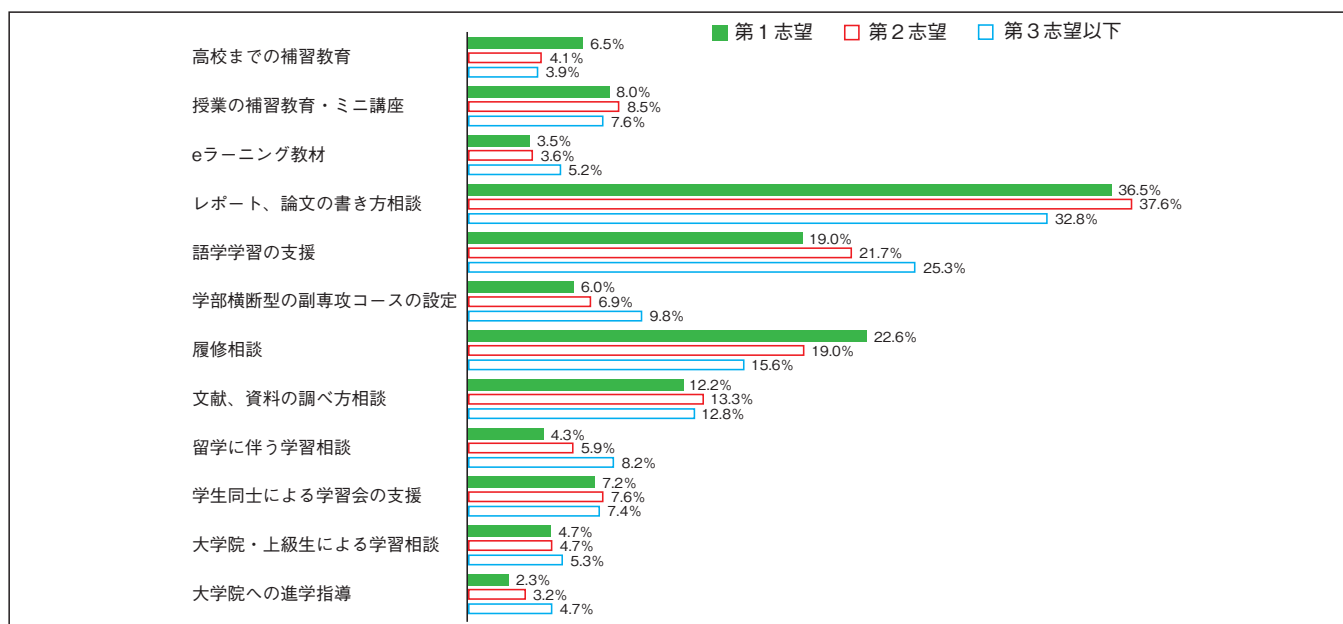


④ 増やしてほしい授業形態（複数回答可・3つまで）



「増やしてほしい授業形態」について、「出席重視」を除けば、ほとんどの項目では、特に「授業内容に興味がわく工夫」、「小人数・ゼミ形式」、「意見や考え方を述べる」、「英語で行われる授業」の項目で、第3志望以下、第2志望は、第1志望より高い割合を示しています。

⑤ 授業以外で、大学で充実して欲しかった学習の支援（複数回答可・3つまで）



「授業以外で、大学で充実して欲しかった学習の支援」について、第3志望以下の場合には「eラーニング教材」「語学学習の支援」、「学部横断型の副専攻コースの設定」、「留学に伴う学習相談」、「大学院・上級生による学習相談」、「大学院への進学指導」においてより高い割合を示しています。

3. まとめ

卒業時アンケートの分析からも入学志望順位別での差異が見られました。1週間の生活時間について、第1志望の「授業などへの出席」・「予習・復習」の時間は、第2志望・第3志望以下より比較的長いものに対して、第2志望・第3志望以下の「卒論・卒研」、「就職活動」の時間、第3志望の「自主学習」の時間がより長い傾向が見られましたが、各志望順位別で「自主学習」がまだ不十分であることが明らかになりました。

また「知識・能力を身に付けたか」、「学部・学科、就職活動の結果への満足度」について、第1志望は第2志望・第3志望以下より肯定的な回答の割合が高いことが示されました。

「増やしてほしい授業形態」については、「授業内容に興味がわく工夫」、「小人数・ゼミ形式」、「意見や考え方を述べる」、「英

語で行われる授業」について、第2志望・第3志望以下は、第1志望より高い割合を示しています。「授業以外で、大学で充実して欲しかった学習の支援」については、第3志望以下の場合には「語学学習の支援」・「学部横断型の副専攻コースの設定」・「留学に伴う学習相談」について、より高い割合を示しました。

上述の分析結果から、本学にとって、学生の「自主学習」を増やすことが重要な課題であり、また学生の学習支援を強化し、第1志望の学生により高いモチベーションをもたせるようにすると同時に、第3志望以下の学生に、アクティブラーニングなどの新たな教育方法の利用、外国語教育・学部横断型教育の強化などを通じて満足度を高めることが重要であると考えられます。

教育・研究の質を保証し、改革・改善のためのPDCAサイクルを構築していくためには、学内外の現状をはじめとする様々な情報について収集・調査分析・検証を行い、それに基づいた大学の政策を形成していくことが必要です。本学では、平成25年9月にIR室を設置し、学長直轄の組織として上記活動を行っています。このような背景に加え、高等教育を取り巻く環境がひとつの大きな転換点を迎えようとしており、高等教育の質的転換や質保証という議論が盛んに行われています。このような状況を踏まえ、あらためて本学における高等教育政策の課題を洗い出し、今後の展開について、議論をするためには、教育学をはじめとする様々な分野の知見が必要と考え、平成28年10月に高等教育研究部会を設けました。

全5回開催した部会では、本学における高等教育に関する課題

の抽出を行いました。具体的には、従来の講義型授業からアクティブ・ラーニングの積極的な活用、それに向けたハード面での設備の充実化、英語で行われる授業における全学的な学習成果、目標の設定、学習成果の測定指標の開発など様々な観点から議論が展開されました。特に、学習成果の測定指標開発においては、平成33年度に受審予定の第3期の認証評価項目に含まれていることもあり、これらに先進的なアメリカでの事例を交えながら、議論を行いました。

今後は、本部会にて共有された本学の高等教育における課題と、解決に向けた提言をどのように改善に生かすことができるかが問われることから、全学的な対応が必要な事案や学部別に改善案を検討する事案などの切り分けを行い、改革・改善に向けた活動が推進されるように学内部署と連携を図ってまいります。

High-Impact Educational Practices



First-Year Seminars and Experiences

Many schools now build into the curriculum first-year seminars or other programs that bring small groups of students together with faculty or staff on a regular basis. The highest-quality first-year experiences place a strong emphasis on critical inquiry, frequent writing, information literacy, collaborative learning, and other skills that develop students' intellectual and practical competencies. First-year seminars can also involve students with cutting-edge questions in scholarship and with faculty members' own research.

Common Intellectual Experiences

The older idea of a "core" curriculum has evolved into a variety of modern forms, such as a set of required common courses or a vertically organized general education program that includes advanced integrative studies and/or required participation in a learning community (see below). These programs often combine broad themes—e.g., technology and society, global interdependence—with a variety of curricular and cocurricular options for students.

Learning Communities

The key goals for learning communities are to encourage integration of learning across courses and to involve students with "big questions" that matter beyond the classroom. Students take two or more linked courses as a group and work closely with one another and with their professors. Many learning communities explore a common topic and/or common readings through the lenses of different disciplines. Some deliberately link "liberal arts" and "professional courses"; others feature service learning.

Writing-Intensive Courses

These courses emphasize writing at all levels of instruction and across the curriculum, including final-year projects. Students are encouraged to produce and revise various forms of writing for different audiences in different disciplines. The effectiveness of this repeated practice "across the curriculum" has led to parallel efforts in such areas as quantitative reasoning, oral communication, information literacy, and, on some campuses, ethical inquiry.

Collaborative Assignments and Projects

Collaborative learning combines two key goals: learning to work and solve problems in the company of others, and sharpening one's own understanding by listening seriously to the insights of others, especially those with different backgrounds and life experiences. Approaches range from study groups within a course, to team-based assignments and writing, to cooperative projects and research.

Undergraduate Research

Many colleges and universities are now providing research experiences for students in all disciplines. Undergraduate research, however, has been most prominently used in science disciplines. With strong support from the National Science Foundation and the research community, scientists are reshaping their courses to connect key concepts and questions with students' early and active involvement in systematic investigation and research. The goal is to involve students with actively contested questions, empirical observation, cutting-edge technologies, and the sense of excitement that comes from working to answer important questions.

Diversity/Global Learning

Many colleges and universities now emphasize courses and programs that help students explore cultures, life experiences, and worldviews different from their own. These studies—which may address U.S. diversity, world cultures, or both—often explore "difficult differences" such as racial, ethnic, and gender inequality, or continuing struggles around the globe for human rights, freedom, and power. Frequently, intercultural studies are augmented by experiential learning in the community and/or by study abroad.

Service Learning, Community-Based Learning

In these programs, field-based "experiential learning" with community partners is an instructional strategy—and often a required part of the course. The idea is to give students direct experience with issues they are studying in the curriculum and with ongoing efforts to analyze and solve problems in the community. A key element in these programs is the opportunity students have to both *apply* what they are learning in real-world settings and *reflect* in a classroom setting on their service experiences. These programs model the idea that giving something back to the community is an important college outcome, and that working with community partners is good preparation for citizenship, work, and life.

Internships

Internships are another increasingly common form of experiential learning. The idea is to provide students with direct experience in a work setting—usually related to their career interests—and to give them the benefit of supervision and coaching from professionals in the field. If the internship is taken for course credit, students complete a project or paper that is approved by a faculty member.

Capstone Courses and Projects

Whether they're called "senior capstones" or some other name, these culminating experiences require students nearing the end of their college years to create a project of some sort that integrates and applies what they've learned. The project might be a research paper, a performance, a portfolio of "best work," or an exhibit of artwork. Capstones are offered both in departmental programs and, increasingly, in general education as well.



図 High Impact Educational Practices

High Impact Educational Practices: What They are, Who Has Access to Them, and Why They Matter 2008より

アメリカの全米カレッジ・大学協会において Liberal education and America's Promise (LEAP) という取り組みが進められています。上図では、その取組の一環としてまとめられた Liberal education における効果的な学習形態について表されています。

日中高等教育研究ワークショップ—大学教育の質的保証と評価

平成29年1月11日、東洋大学IR室と国際部の共催のもと、「日中高等教育研究ワークショップ—大学教育の質的保証と評価」を東洋大学白山キャンパスにて開催しました。

グローバル化の進展、知識基盤社会への転換、高等教育の量的な拡大、若者の価値観の変化など、大学を取り巻く背景が大きく変わってきている中、先進諸国をはじめ多数の国で、高等教育は量的な拡大から質的保証へと大きな転換期を迎えています。高等教育の質的保証および評価に関して、日中両国は各自固有な問題を抱えつつも、共通な課題も少なくありません。今回、中国の高等教育評価研究の第一線で活躍され、かつ本学の協定大学においても大学評価に携わっている責任者をお招きし、日中両国の大学教育の質的保証に対する取り組み及び課題に関して研究発表をしていただきました。

ワークショップの開催前には、中国側の講演者が東洋大学の福川伸次理事長、竹村牧男学長をそれぞれ表敬訪問し、世界の動向を俯瞰的に見据えながら意見交換を行いました。そして、グローバル経済が進展する中、今後、アジアにおける質的保証を伴った大学間交流の飛躍的拡大がアジア各国との良好な関係に発展すること、また人材養成の最高教育機関として日中両国の大学間、とりわけ本学と協定大学との実質的な学術交流、教員・学生交流の一層の拡大が重要であるとの認識で一致しました。

ワークショップは、東洋大学の神田雄一副学長の開会挨拶で始まり、続いて、1.「中国における大学教育評価の展開」王戦軍（北京理工大学 教授）、2.「東洋大学における教育質保証の取り組み」神田雄一（東洋大学

副学長）、3.「大学教育の質保証における高等教育研究所の役割」宋彩萍（上海对外貿易大学 教授）、4.「大学教育の質保証の取り組み—中国海洋大学の事例」宋文紅（中国海洋大学 教授）、5.「アジア大学におけるIRと教育の質的保証」劉文君（東洋大学 准教授）の5名より講演が行われました。その後、ワークショップの総括として、筑波大学の金子元久教授より「総括—大学教育の質的保証と評価」に基づき、日中両国の大学教育の質的保証と評価における共通点および差異について整理し、大学教育の質的保証および大学間の交流におけるIRの果たす役割の重要性と課題を明確にされました。

ワークショップの参加者は本学の教職員が中心でしたが、台湾評価協会の秘書長・副秘書長も台湾より来日出席され、活発な意見交換及び議論が展開されました。



第10回EMIR勉強会「直接評価による学修成果の可視化と質保証強化への挑戦」

●主催：山形大学エンロール・マネジメント（EM）部

●日時：平成28年11月11日（金）

エンロール・マネジメント（EM）とは、『大学が欲しい人材（学生）を入学させて、辞めずに卒業し、その後も繋がる仕組み』であり、最終目標は『在学中に学生の価値を最大に高めること』にあります。山形大学では、この考えに基づき、さまざまな取組を展開しています。

その中でIRが果たす役割は、学内における合意形成に際して無駄のない適正な議論を行えるようデータの「見える化」を行うことであり、山形大学ではIR-PlusとSASを導入し、他部署からの依頼にもすぐに対応することが可能となっています。そして、「見える化」されたデータは、会議に参加した全員が意見を「言える化」

に導き、集合知を生み出すことが最大のメリットとして挙げられていました。ただし、DBに用いるために諸データのクリーニングを頻繁に行うとともに、地道に継続してデータを蓄積していくことが第一に重要であるとのことでした。

なお、山形大学では、現在、直接評価による学習成果の可視化に向けた取組をスタートしており、独自の基盤力テストを開発中です。これは、学部ごとの学問基盤力、全学共通の実践基盤力と国際基盤力から成り、直接指標に基づく評価に向けて積極的に動いています。アメリカの認証評価における学習成果測定が、既に直接指標のみを学習成果測定とみなす段階（GPAや学生アンケートは間接指標に分類される）になりつつある状況において、質保証強化と学生の価値の最大化へ向け積極的に取り組んでいると感じました。

IR室シンポジウム開催報告

平成29年3月1日（水）に、「高等教育における質的転換とIRの役割」と題して、シンポジウムを開催しました。文部科学省高等教育局大学振興課・角田喜彦課長、同志社大学・山田礼子教授、早稲田大学・吉田文教授、本学IR室・劉文君准教授による講演・パネルディスカッションを行いました。参加者約120名のもと大変有意義な意見交換の場となりました。詳細は、次号にて報告予定です。



IR室活動報告（平成28年8月～平成29年3月）（抜粋）

▶▶▶ 運営委員会

- ①平成28年度第4回 日時 平成28年9月7日（水）12:15～12:50
- ②平成28年度第5回 日時 平成28年10月5日（水）12:35～13:30
- ③平成28年度第6回 日時 平成28年11月16日（水）12:30～13:40
- ④平成28年度第7回 日時 平成28年12月7日（水）12:20～13:10
- ⑤平成28年度第8回 日時 平成29年1月18日（水）12:15～13:05
- ⑥平成28年度第9回 日時 平成29年2月8日（水）12:30～13:30

▶▶▶ 高等教育研究部会

- ①平成28年度第1回 日時 平成28年10月7日（金）
- ②平成28年度第2回 日時 平成28年11月25日（金）
- ③平成28年度第3回 日時 平成28年12月9日（金）
- ④平成28年度第4回 日時 平成29年1月13日（金）
- ⑤平成28年度第5回 日時 平成29年2月28日（火）

▶▶▶ 学内委員会等での報告

●学長室会議報告

- ①「平成28年度東洋大学新生アンケート結果分析」（平成28年9月7日）

●運営委員会報告

- ①「平成28年度東洋大学新生アンケート結果分析」（平成28年9月7日）
- ②「平成27年度卒業時アンケート結果分析（2）—入学時志望順位に着目して」（平成28年10月5日）
- ③「平成24年度～平成27年度別GPAの相関についての分析—学部別」（平成28年11月16日）
- ④「中国におけるリーディング大学の取組—吉林大学の事例」（平成28年11月16日）

●高等教育研究部会報告

- ①「平成27年度卒業時アンケート結果分析」
- ②「平成24年度～平成27年度別GPAの相関についての分析」

●学部長会議報告

- ①「平成28年度東洋大学新生アンケート結果分析」（平成28年9月16日）

▶▶▶ シンポジウム・ワークショップ

- ①シンポジウム 平成28年度IR室シンポジウム「高等教育における質的転換とIRの役割」（平成29年3月1日）
- ②ワークショップ IR室・国際部共催日中高等教育研究ワークショップ「大学教育の質的保証と評価」（平成29年1月17日）

▶▶▶ 国内調査研究

- 2016年10月 大阪大学、近畿大学、京都大学、同志社大学
- 2016年11月 龍谷大学